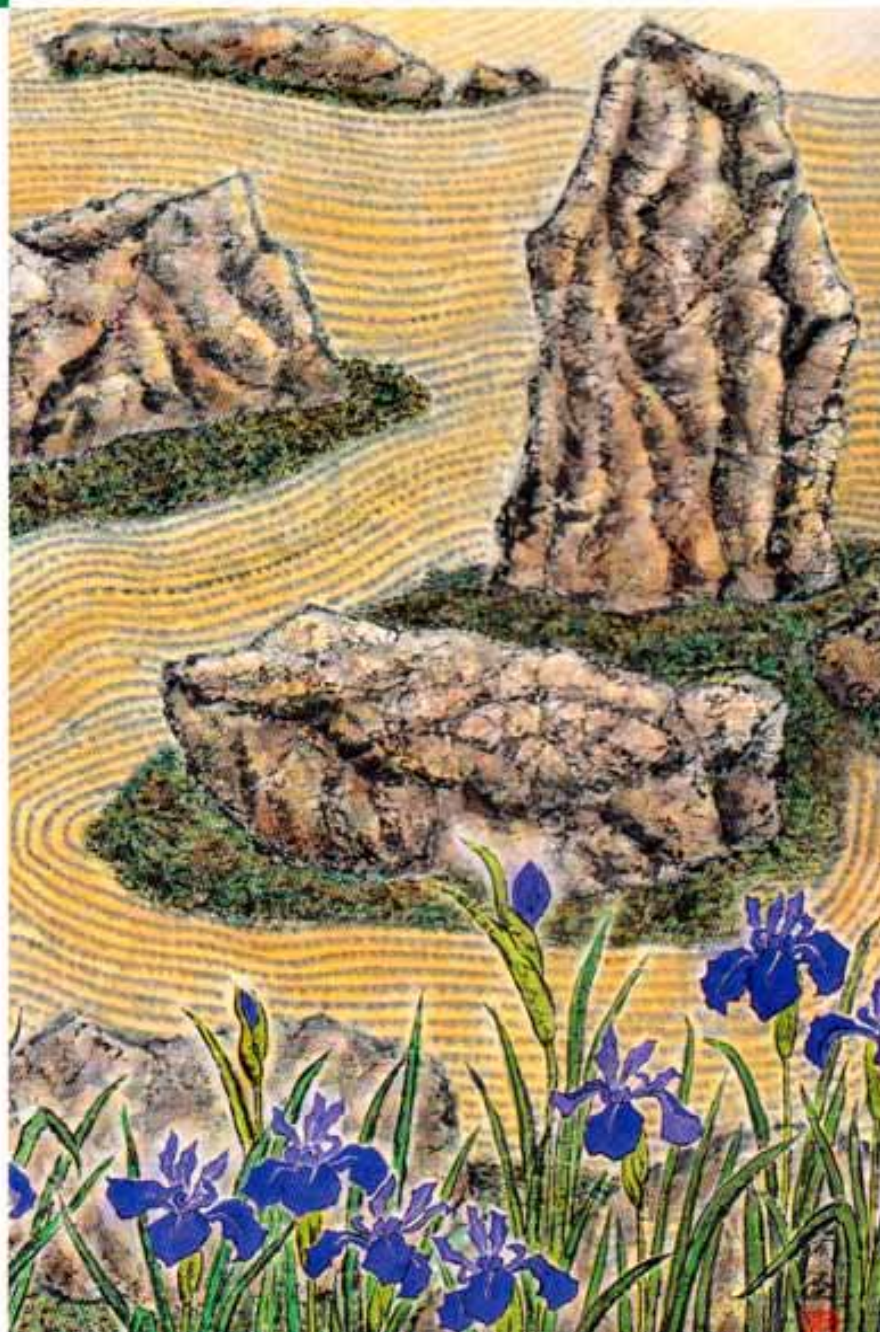


沖

8

2021

俳句雑誌 [対巻]



梅花藻

能村 研三

日蓮生誕八百年

先日、歌舞伎座で上演された芝居「日蓮」を見に行った。歌舞伎座は父が元氣な頃に一緒に連れて行ってもらってから久しく行くことがなかったが、新装なった歌舞伎座に初めて足を運んだ。

今回の「日蓮」は日蓮の生誕八百年を記念して上演されたもので、市川猿之助が演じて、比叡山で修行して人々の幸せをひたすら願ひ、連長が日蓮と名を改め立教改宗に向けて山を降りていくまでを描いている。理想に燃える日蓮を演じる猿之助の迫真の演技に引き込まれ、改めて日蓮の偉大さを実感した。

私の家の菩提寺の延壽寺は日蓮宗のお寺で、現在私が檀家総代を務めていることから、三年前に日蓮聖人生誕八百年の記念事業委員会を立ち上げ、様々な事業に取り組んだ。

日蓮は房州小湊で生まれたこともあり、私が中学生の頃に千葉県が生んだ偉人の足跡を調べようと、ゆかりの誕生寺や清澄山、さらに鎌倉のお寺を訪ねたことがある。

私の住む市川には、日蓮宗の荒行

ひとすぢの光となりて蛇泳ぐ

梅花藻を育む水に砂のきら

曲る度変はる山容青嶺濃し

根つからの数字嫌ひや草を刈る

扇子閉づ封印したる一意かな

コルク栓瓶に戻らぬ麦の秋

苦み鮎添ふは蓼酢のうすみどり

峨峨と峙つ青鋭峰が国頌つ

西日落つ片手返し中華鍋

白靴を汚さずに遭ふ敵手かな

の修行の寺である中山法華経寺があり、手児奈伝説で有名な真間山弘法寺があることも、日蓮聖人がより身近な存在として感じている。

真間山弘法寺では、二十数年前に管主であった酒井日慈さんから「人間学校」で俳句の指導をしてほしいとの依頼があり、教室を開講し約二十年間続いた。現在はお寺での「人間学校」は開催されなくなったが、折角、酒井日慈さんが、一宗教にとらわれることなく多くの人に参加してもらいたいという気持ちがあったので、現在は山を降りても「人間学校」の名前を冠した俳句会を続けている。

また日蓮の終焉の地である総本山の池上本門寺では毎月定期的に発刊される「池上」という機関紙の俳句欄の選者を務めて、十数年が経った。この欄には、「沖」の人たちも多く投句を寄せていただいている。

私は決して日蓮宗の狂信的な信者ではないが、幼い頃から親しみのある日蓮に半生を通じて縁を戴いていることはありがたいことである。

能村 研三

郭公のひと声朝の錨を振る
 女将より父のこと聞く鮎の宿

雨蛙鳴かせて夕の風呂長し

椎匂ふ己に腹の立つばかり

青葉木菟父の形見に歎異抄

戦争を語らず逝けり夾竹桃

青岬暮れて漁火数珠つなぎ

登四郎先生に「泳ぎつつふと溺れたし
 鰯雲」という句がある。研三主宰に何っ
 たことはないが、先生のお姿、雰囲気は
 はスポーツマンというイメージは浮かん
 で来ない。それでも、先生に泳ぎの句が
 多いことからすれば、泳ぎが得意だった
 のではなかるうか。海を泳いでいて「溺
 れたし」とは言うものの、心地良さそう
 な余裕が感じられる。

さて私はどうと、よく川の話をする
 ので、泳ぎも上手いだろうと思われがち
 であるが駄目である。遊びは対岸へ泳ぎ
 渡ることで、犬掻きでも何でも着けば良
 かった。鮎を獲るため潜つてばかりいた
 ので、二十五メートルプールなら潜った
 ままでも行けるのであるが、普通の泳ぎ
 では誰でも出来る、顔を上げての息継ぎ
 が出来ないのである。スキーもそのと
 りで、雪国の移動手段であつて、ただ滑
 りさえすれば良いのである。何でも「出
 来る」とは答えるが、決して上手くはな
 い。山の斜面を滑降しても不恰好で様
 にならないのだ。

蒼茫集

忘れ物とりに

辻美奈子

*忘れ物とりにアマリリスが真つ赤
 螺子巻いて貰へなくとも時計草
 苔青く負うて旧字のやうに亀
 ゆふぐれの水統べて蛇泳ぎけり
 生家かな夏場所はいま前頭
 ともしびの色を真中に茄子の花

藍の濃淡

菊地光子

*緑蔭の音又のやうに渉る風
 山々の藍の濃淡遠くわくこ
 う
 忘れたき事は数へず蝌蚪に足
 夕暮の川音たかし青胡桃
 偽りもときに労り七変化
 ふはふはの錦糸卵や宵祭

菖蒲の湯

大畑善昭

* 鰐口を打てば一山朴匂ふ
大根の花はほのかな枕花
剣道の子に沸かしおく菖蒲の湯
黒揚羽天にも荒磯ありて発つ
子蟻螂えやみに鎌をあげてをり
釣舟草水分よりの水奔り

座せぬ椅子

千田百里

母の日の自祝シャネルの五番より
先師想へば吾の胸に咲く朴の花
* 座せぬ椅子の並ぶ卵の花腐しかな
斯うしてはをれぬと六月の手足
あやふやな記憶烏瓜の花
詩囊肥ゆ腐草蛭となる夜かな

蚕豆

埴誠一郎

* 蚕豆や型にはまらず粹にゐる
夕さりの茅花流しや沖に船
鳥容れてみどり膨らむ椎若葉
茅花流し河童の芋錢旧居かな
初夏や自在に動く河馬の耳

螢袋

吉田政江

朝市の海より明けて青葉潮
はや雲の入る隙なき青田面
来るくるてふ大社の神輿まだ見え
螢袋うつむき過ぎて疲れさう
* 決断の甘さを突かれ心太
麩に咽せて忘るるその前後

定型 菊川俊朗

卯の花腐し言葉の裏を探る癖
葉桜や電車は曲がるとき軋み
* 畏るべき定型にして五月富士
謀ならむ青梅のひそみぬる
梅雨深し昭和の残る高架下

太鼓橋 道端 齊

湾央の竿の撓りや朝曇
椽咲くや空の高くに鈴の音
風鈴の迎へる駅に芙美子像
* 正論に透ける青さや今年竹
睡蓮の薬の黄色や太鼓橋

アイステイ 石田 静

* アイステイ ずずと言はせ恋終る
青梅雨や表面張力すゞ転び
朝顔の絡む有刺鉄線とも知らず
関取が町に 来た 夏 肩車
ラジオ体操まづはお辞儀の夏帽子

夕端居 川高郷之助

* 赤ん坊に胡坐とふ椅子夕端居
旧文字の町医の門標額の花
手書きなる古書の定価や桜桃忌
牛蛙人は 大声 禁ぜられ
青葉して社の屋根の沈みたり

柏餅 中村重幸

遠き日を遠き卯波に見てをりぬ
* さつと葉をむかれて目覚む柏餅
福耳の淋しき人や桐の花
恰好よき夏帽かぶり帽子売る
意味知らぬ文字のシャツ着て夏に入る

実感 荒井千瑳子

* 曖昧な老いの実感草矢打つ
ががんぼやありさうで無き死の覚悟
いつの日か出で帰らざる西日の門
釣鐘草夕闇呼びて離さざる
忠魂碑隆々と建つ青葉闇

川の貌 森村江風

鮎走る早瀬で攫ふ日のひかり
喧嘩してひとり帰る子麦の秋
時の日の時の倒立砂時計
爪先の待ちくたびれし祭足袋
* 萍や昭和が変へし川の貌

半世紀 富川明子

声かけて釣果放てり谿若葉
要なる記憶がとんで青山椒
飴いろの藤椅子父の半世紀
* 父の日の煙草と大き掌の記憶
みづくらげ空に浮かべば昼の月

一螢火 石崎和夫

降海の稚魚きらきらと麦の秋
鮎すくふ夜つびて大撫網潮にさし
夏つばめ過る鯨の解体場
* 一螢火うるしの闇へ曳光す
若竹や射込む少女の馬手撓ふ

大夕焼 栗坪和子

* 東京は坂多き町大夕焼
鮎を焼く竹の青葉をくすべては
白緋診察券の残りたる
青胡桃葉守りの神も在すらむ
アトリエに紅茶運ばれ沙羅の花

沖作品



能村研三選

* 追分の標の如く朴若葉

千葉

関 妙子

日捲りの一文を読む今朝の夏
確かなる目方手に受く初節句
雲降りる程にあらねど夏嶺かな
手押しポンプ噴いて路地裏夏始動

石川

坂下 成紘

* 人は詠み鳥は唄ふや柿若葉
鉄線花みな天辺に咲きたがる
芍薬や派手すぎないか仏花には
尺八の名手草笛儘ならず

福島

根本 世津

* 稜線に雲立ち上がる芒種かな
花合歓や少女に淡き恋心
したたかに打水をして老舗たり
芍薬の供花の純白母を恋ふ
青簾湖の小舟に灯の入りて

* 雨音の勇みをつけて夏来る

熊本

石橋みどり

一徹を貫きし父麦の秋
背伸びしておさげの少女アマリリス
釣鐘草小さき風の抛り所
五月雨の音遠くなる夢の中
花は葉にむかし生家の在りし場所
未来へと宙蹴つてゐる半仙戯

市川市

澤田 英紀

* 夏暁の竹刀打ち込む音清し
草笛の音色潤ふ水の郷

千葉

里村 梨郵

* 檣灯の出船や海霧の深みゆく
麦秋の風を纏へる馬頭琴
椰木青葉伊八刻みし七福神
花朴の香る空あり登四郎忌
蒼穹に白帆を展げ夏に入る

オリープの葉裏燦々風薫る

金光 浩彰

* 逆光の海金泥に光琳忌
昼席の跳ねて巷は走り梅雨
父の日や無聊を託つこともなし
昼下りの仙人掌の花うす眠り
雲雀野の遊子とならむ千切雲
向かひ合ふ山の銜やほととぎす
多羅葉に一句ひつ搔く聖五月

牛島 晃江

* はつ夏の風は浪漫波飛沫
吹き降りの白き視界や花石榴
人が来てまた人の来て花一樹

埼玉

浜田はるみ

* 咲き満ちて風を呼びたる桜かな
さくらしだれて密談のふたりかな
花影に吾の影も入れふぶきたる
余花ふぶく十戸で守る千年樹

千葉

熊谷 成子

* 山青葉百面相の羅漢かな
よき風や谷津の田んぼの鯉幟
川水張るじわじわ満ちる光かな
朝摘みの莢豌豆の仄香る
緑蔭をゆつくりと押す乳母車

薫風や大路を抜ける段葛

栃木

五十畑悦雄

濃あぢさゝの作務衣にあふ若き僧
* みちのくの山容青し風青し
しづかなる癒しの水辺ひつじ草
咲き初むは雨の彩なり七変化
新緑や千櫨の井戸の密とあり
泥川に魚跳ねる音えごの花

千葉

平嶋 共代

* 風すこしわが掌に残し螢とぶ
螢火はスターダストの中に消ゆ
汗ばみてきしりハビリのペダル漕ぐ
万緑や火を落したる登り窯

鈴木 和江

* 山の奥奥へと瀧音誘へり
木のベンチ蟻一匹と我ひとり
溶接の火花飛び散る街薄暑
浜屋顔ここに始まる九十九里

福岡

伊藤 照枝

* 絹糸の総光りをり夏来る
三尊の金の輝き若葉雨
地に流る枝垂桜の葉の怒濤
初夏や疫の世弾け繰り念珠

飛鷹選評



能村 研三

追分の標の如く柿若葉 関 妙子

追分は元々牛馬を追い、分ける場所を意味したが、後になって街道の分岐点も意味するようになった。新宿追分や、信濃追分などが今も地名として残っている。右何々街道、左何々街道と彫られた標柱が設けられ、街道を旅する人々が休む場所でもあり、遠くから見ても目標となる大きな木が植えられ若葉の下で憩う人たちがいた。柿の葉は一枚が大きく、柔らかな緑の葉から洩れる日差しも優しく行き交う人たちを照らした。

人は詠み鳥は唄ふや柿若葉 坂下 成紘

初夏の頃、柿若葉は透きとおるような美しさを見せる。さまざま新緑の中でも格別のみずみずしさである。緑が鮮やかで光沢のある葉が特徴で、初夏の陽射しに照り映える様子は、まことに美しく、野鳥の囀りも賑やかになり、俳句を詠む作者をはじめ俳人たちの詩心を昂ぶらせる。

稜線に雲立ち上がる芒種かな 根本 世津

芒種は二十四節気の一つ。稲や麦などの穀物の種蒔きをする頃という意味である。爽やかな初夏に別れを告げ、やがて入梅を迎えるが、山の稜線の雲のかかり具合を見ることによって、ある程度、

天気の良いイメージを掴むことができる。農業を営む人たちにとっては、いち早く山の天気を占うことが昔から大事であると言われた。

雨音の勇みをつけて夏来る 石橋みどり

石橋さんがお住まいの熊本県は「線状降水帯」の言葉が頻繁に出てくるほど大雨による被害を被っている地域である。本格的な夏の到来はこの雨が勇みをつける時期を耐え忍んだあとに訪れるのである。

夏暁の竹刀打ち込む音清し 澤田 英紀

剣道少年の朝の日課であろうか。朝まだ日が昇らない頃から少年は気合をいれながら竹刀の素振り始めた。澀刺とした少年の声は清々しく聞こえた。少年は学校の剣道場での朝練に出かけた。

檣灯の出船や海霧の深みゆく 里村 梨邨

里村さんは館山の方であるから、館山湾に出入りする大きな船を詠んだのだろう。檣灯は夜間の航行で、船の前方のマストに掲げ、船の前面を示す白色光の灯火のこと。海霧が深く立ち込める中を船の影を映した。

逆光の海金泥に光琳忌 金光 浩彰

江戸時代の画家尾形光琳の忌日は六月二日。光琳の代表作と言えば国宝「紅白梅図屏風」で背景の金地部分は金粉を膠で溶いた「金泥」を塗った可能性が高いとした研究が進んだ。館山から見る逆光の海のきらめきも光琳の金泥を感じさせる。